

令和6年度 第2回山鹿市総合教育会議 議事録

日 時	令和7年2月27日(木) 午前9時30分
場 所	山鹿市役所(5階501会議室)
出席者	早田市長、堀田教育長 教育委員：野中委員、野口委員、立山委員、芹川委員 市職員：大林総務部長、中尾教育部長、佐藤教育部首席審議員、北本首席教育審議員、西島教育総務課長、田上学校教育課長、西浦学校教育指導室長、林田学校教育指導室審議員、橋本学校教育指導室審議員、長瀬生涯学習・スポーツ課長、淵上文化課長、坂本教育総務課長補佐、角田学校教育課長補佐、井口学校教育課長補佐、井上生涯学習・スポーツ課主幹、山口文化課長補佐、小林教育総務課長補佐、井上教育総務課総務企画係長
傍聴者	なし

1 開 会

2 議 題

(1) 不登校対策事業について

(2) 幼児期からの英語教育の推進について

3 その他

4 閉 会

発言者	発言内容
小林教育総務課長補佐	<p>おはようございます。</p> <p>それでは、時間となりましたので、令和6年度第2回山鹿市総合教育会議を開催します。</p> <p>皆様、ご起立をお願いします。礼。ご着席ください。</p> <p>まず、開会に際しまして、議題と会議の公開の可否について確認します。</p> <p>本日の議題は、「不登校対策事業について」及び「幼児期からの英語教育の推進について」となっております。</p> <p>本件議題につきましては、非公開とするべき事由がないことから、本日の会議及び議事録につきましては公開とします。</p> <p>なお、本日の傍聴者の方はおられません。</p> <p>それでは、早速ですが、議題に入ります。</p> <p>これからは、早田市長に会議の議長をお願いいたします。</p> <p>早田市長、よろしく申し上げます。</p>
早田市長	<p>改めまして、皆さん、おはようございます。</p> <p>座ったままで進行させていただきたいと思います。</p> <p>今日は議題が2つございます。</p> <p>1つは「不登校対策事業について」、2つ目が「幼児期からの英語教育の推進について」ということでございます。</p> <p>「不登校対策について」は、コロナ明けからこれも全国的なことなんですけども、非常に不登校生が増えているということでございます。</p> <p>山鹿市の現状は、今どういうふうになっているのか。それに対する対策、これからどういったことをされていくのか、そういったものを議論ができればと思います。</p> <p>それから2つ目は、「幼児期からの英語教育」でございますけれども、今、小学校・中学校にALTがいますけれども、その他にも、いろんな英語教育をなされていると思いますけれども、現実的に今の英語力が社会に通用するのかどうか、それは高校・大学で学んでからの話も含めて考えられますけども、中学校まででどれだけの日常会話、そういったものができるのかどうかがあります。</p> <p>こういったことを申しますのも、現在、熊本もですね、TSMCの影響で外国の方々が家族も含め、また労働者の方も含め、どんどん外国人の方が増えてきております。</p> <p>この九州を見ておりますと、やはり経済圏というのは福岡県でございます、福岡県と山鹿市は隣接しております。アジアの中でもですね、福岡、特に博多あたりはどんどん伸びていくと思いますので、そういったことを考えますと、さらにまた外国の方との触れ合う機会、そういったものが増えていきますので、山鹿の子供たち、将来のある子供たちが、これから営業力を使ってビジネス展開をするときにですね、本当に役立つ英語力そういったものができているのか、そういった将来のことも含めてですね、議論できればというふうに思っております。</p> <p>それでは、まず1つ目の「不登校対策事業について」説明をお願いします。</p>
西浦学校教育指導室長	<p>学校教育指導室長の西浦です。</p> <p>お手元に資料がございますので、その資料に沿って私の方で説明させていただきます。よろしく申し上げます。</p>

まず、「不登校対策事業」といたしまして、「1. 熊本県及び本市の不登校の現状と国の動向」をご説明いたします。

2 番目に、「本市の不登校対策の取り組みについて」、3 番目に「今後の課題と方針について」をご説明いたします。

よろしく申し上げます。

それでは、まず資料の1ページ目です。

令和5年度、熊本県の不登校の現状のグラフが載っております。

年々、不登校生徒が増えているということが、このグラフから分かりますが、平成27年、28年、29年ぐらいは、年間100人から200人程の増加がありました。

令和に入りまして、先ほど市長も言われましたが、コロナ等もございまして、年間1,000人以上の数で増えているということがグラフを見ると分かると思います。

令和5年度、5,700名程度の不登校の児童・生徒がいます。

資料の2ページ目です。

上の方の表ですが、不登校生が約5,700名、小学生が約2,200名、中学校が約3,600名います。その不登校児童・生徒数で、90日以上欠席している数がクラブに載っています。

小学校におきましては45.7%、約1,000名の子供たちが90日以上休んでいるということです。中学校におきましては58.8%、約2,200名の子供たちが90日以上休んでいるということになります。

下の方です。不登校生徒の出現率というものがございまして。各市町村等で不登校の児童・生徒数だけではなくて、生徒総数を分母にしまして、出現率を表しております。

令和元年度の本市は、1番下に記載がありますが、0.21%ということで、他の市町村に比べても低い数字でございました。

ただ、令和3年度、令和5年度になりますと、山鹿市も令和3年度は2.24%、令和5年間2.63%増えている状況です。

これは山鹿市だけではなく、熊本県、全国も含めて、右肩上がりになっております。

3ページ目の上の方の表です。出現率をグラフで表しました。令和元年度の全国・県の平均の出生率がありませんでしたので、令和元年度から今年度まで山鹿市の推移のグラフになります。3年度から5年度に向けまして、全国・熊本県はやはり右肩上がりになっています。山鹿市におきましては、緩やかな右肩上がりということになっています。

繰り返しになりますが、全国、県、山鹿市も含めて不登校生徒の増加をどうにかして止めるために、それぞれの自治体で取り組まれていると思います。山鹿市におきましては多くの施策を実施しています。

結果だけ見ますと、不登校生徒は増えておりますが、緩やかな右肩上がりになっているのを見て取れると思います。

3ページに、不登校の要因考察を表しております。

不登校出現率は、国・県よりも山鹿市は少ないということが見て取れます。

先ほど熊本県も年々増えているということをお伝えしましたが、全国の不登校生徒を見ますと、やはり年間1万人ずつ増えているような状況です。やはりコロナ過

の影響も大きく、年間2万人、令和3年から令和5年度につきましては年間5万人増加しているというのが全国の数になっています。

不登校の原因も複雑化しており、従来の無気力・人間関係によるものに加えて、不登校児童・生徒本人にも原因が分からない例も増加しているというのが県からの報告に上がっております。以前は子供たち同士の喧嘩であったり、いじめだったりするのが1番大きな原因ではございましたが、今は児童・生徒はなぜ学校に行けないのか、本人も分からないというのが増えているということです。

あと先ほども申しましたが、やはりこの不登校の増加の1番の原因は新型コロナウイルス感染拡大に伴った影響が非常に大きいと思います。国・県も含めてですね、学校を閉鎖するという施策が取られましたが、それを受けまして、保護者の意識、子供たちの意識も、学校には行かなくてもいいというような意識が根強く、現在も残っているのではないかと考えられます。

ただ山鹿市におきましては、様々な取り組みをしていただいておりますが、数値は増えておりますが、成果が出ていると考えます。

国の不登校対策の現状といたしまして、文部科学省から出されているCOCOLOプランというのがございます。そこには不登校児童・生徒すべての学びの場を確保するという、2つ目が子供たちのSOSを見逃さないように「チーム学校」で対応する・支援するという、3つ目が、学校の風土の「見える化」を通して、「みんなが安心して学べる」場所にすること、この3つを国が示しておりますので、これを受けまして、山鹿市でも施策を打っているということをご理解ください。

4ページ目に行きます。

2つ目の「本市の不登校対策の取り組みについて」をご説明申し上げます。

先ほど国の対策にもありましたが、学びの場を確保するという、本市には教育支援センターを3ヶ所設けております。

そこを利用している児童・生徒も多く、最終的には学校復帰というのが大きな目標ではございますが、自分の長所を生かしながら教育活動が展開されています。

また、子供たち1人1人の教育的ニーズに応えるために、不登校対策事業としてサポートティーチャーを数多く配置していただいております。本年度は38名の会計年度任用職員の方にご協力をいただいております。山鹿市には感謝しているばかりです。

他の市町村と比べましても、情報共有、情報交換をする中で、山鹿市のサポートティーチャー数は他の市町村と比べましても多く任用していただいているというのが現状でございます。

非常に感謝しているところです。

あと先ほど申しました校外教育支援センター3ヶ所、児童・生徒1人1人の状況に応じた適切な指導、学習支援を行うということで山鹿教室、鹿本教室、鹿央教室ということで3ヶ所あります。利用している子供たちもいろんな取り組みをする中で、自分に自信をつけて、自己肯定感とかですね、有能感を高めて学校復帰に向けて頑張っているところです。

校内教育支援センターというのは、学校の中でもなかなか教室に入れないという子供もいますので、学校の中でちょっと心を休める場所ということで設置をしている学校があります。山鹿中学校、山鹿小学校、菊鹿中学校、鹿本中学校の4ヶ所

に、空き教室等を利用して行っているところです。

2番目の特別支援教育充実事業、学校の風土の見える化を通して、学校をみんなが安心して学べる場所にするために、特別支援学級に在籍する児童・生徒に対して、合理的配慮協力員3名を配置しております。障がいがある、無しに関わらず全ての子どもたちへの的確なアドバイスを、合理的配慮協力員の先生方にお示ししていただいております。

子どもたちにどう関われば1番効果的なのか。悩みを聞いたり、いろんな事例を紹介していただいて、学校現場としては助かっているという声が多く届いております。

また、不登校及びいじめゼロを目指し、障がいの有無に左右されず、全ての児童・生徒が安心して学校生活を送ることができる環境を整備するという事で、山鹿市におきましては、インクルーシブ教育の充実を図っており、大きな成果が出ております。

障がいの有る、無しに関わらず、子どもたち1人1人に合ったいろんな配慮をしていくというのがインクルーシブ教育ですが、年度が経ちまして、各学校の取り組みが薄くなっている部分もあります。

学校訪問等では全ての子どもたちに配慮をお願いしますということでお願いをしてきたところです。

また、通級教室という学習支援の教室になりますが、4ヶ所、山鹿中学校、山鹿小学校、八幡小学校、鹿本小学校に設置してございます。

3番目です。心の小さなSOSを見逃さずチーム学校での支援では、学校の先生方、特に担任の先生を中心に、全職員をチーム学校として、不登校対策に取り組んでおります。しかし、学校だけでは限界がございますので、外部の専門機関等と繋がりを深めていくという取り組みです。

特にスクールソーシャルワーカーを3名配置していただいております。様々な事案がございます。SSWの先生方も積極的に学校に出向いていただいて、学校だけではなく専門機関等を繋いでいただいていることに感謝するばかりです。

今後もしっかり学校だけではなく、外部機関等と連携し、1人でも多くの子どもたちが学校復帰、目標を持って学校生活が送れるよう支援ができればと考えております。

今後の課題と方針について簡単にまとめておりますが、繰り返しになりますけれども、不登校の原因というものは非常に複雑化しているというのが現状です。

学校現場の先生方も、家庭訪問を中心に、また担任の先生に任せるのではなく、管理職の先生も含めて家庭訪問を実施しておりますが、保護者から「もう来ないでください」という声も聞かれます。ただ現場の先生方は本当精一杯動いていただいておりますので、非常に感心するばかりです。

不登校生を減らす、ゼロを目指すということであれば、やはり人員の確保が必要です。現在、山鹿市は手厚くしていただいておりますので、本当に感謝するばかりですが、1人1人のニーズに応えるために、もっと人員の確保が必要ではないかと考えております。

また、1番大事なことは、子どもたちのSOSを見逃さないように、日頃から先生方と子どもたちの関係づくりや学級経営が基本になると思います。学校訪問等を通じ

	<p>て、それぞれの学校には教育委員会から指導をしまいいります。 簡単ですが、不登校対策事業についての説明を終わります。</p>
早田市長	<p>ただいま「不登校対策についての現状と取り組みについて」ご説明がございましたけれども、これについてご質疑があればお願いします。</p>
野口委員	<p>今それぞれの学校で一生懸命に努力されていることは十分分かりましたが、これを見るとですね、不登校ゼロということを目指すという目標でやってきていますね。</p> <p>令和元年ぐらいは、それが本当に絵空事でないような、頑張れば、とんでもない目標ではないような感じでしたが、今はそうはいってられないような状況で、特に中学生がここまで来ているのかということで、半分ショックを受けているんですけども、だから、こうすればいいというような特効薬は中々無いと思いますが、人を確保する、居場所をつくる、まずはそこだと思います。</p> <p>今、関わっている人たちともっと深く、議論をしてですね、私も直接関わってないので、よく分からないんですけど、その関わっている人たちの中から知恵を出す。それから技術というか、そういう専門性の高い事柄、そういうことを出し合いながら、そしてその人の能力を高め、あるいはいろんな経験をされてまいいますから、その経験値を集めて、どうするんだと。</p> <p>やってらっしゃるんでしょうけど、この状況を見て何ができるかということで、やっぱり踏み込んでいただきたいなと言う気がします。</p> <p>非常に難しいと思うし、山鹿市は本当に一生懸命頑張っていらっしゃるんですけど、やっぱりここで1回この数字を見て、立ち止まってみて、今までこうやってきたけど、何が足らなかったのか、何が必要なのかというのを関わっている方で議論を深めていただきたいと思います。</p>
早田市長	<p>ありがとうございました。 他にございませんか。</p>
芹川委員	<p>1つお尋ねなんですけど、私の孫が今6年生なんですけど、5年生の時は、夏休み前から行けなくなってしまってますね、保健室登校したり、そこは学級が良かったんで、隣で勉強するといって、そんなことできるのかと思いながら、ずっと見守っていましたが、6年生になりまして、学級編制をしていただいて、そのあたりを配慮していただいて、現在は6年生なんですけど、何とか頑張ってきました。</p> <p>私も勉強不足なんですけど、山鹿市の場合には通常は、1、2年生が一緒、3、4年生が一緒とかと思いますが、山鹿市の状況はどうですか。1年毎の学級編成とかあるんですか。</p>
西浦学校教育指導室長	<p>毎年、複数クラスがある学校につきましては、1年間の子供たちの様子を見て、割り振りはしてあると思います。</p>
芹川委員	<p>そういうふうにして救われる子供いるんじゃないかと思いました。</p> <p>それともう1つが、休んでしまうと、算数とか教科の積み重ねですが、休んだらプリントをもらいます。その後のアフターといいますが、昔はそんなにいなかったんで、欠席した子供は放課後呼んで教えていました。現在は、サポートティーチャーがとていいと思います。</p> <p>1人で40人全員を見ていた時代から、サポートティーチャーによって手厚くす</p>

	<p>るということは、非常に効果を上げているんじゃないかなと思ったところです。私から以上です。</p>
早田市長	<p>はい、ありがとうございました。 他にはございませんか。</p>
野中委員	<p>今の説明をずっと聞きながらですけども、最初に書類をもらったときにですね。今回、我々に求められているものは何なのかなと、やっぱり最初に思うんですよ。正直、学校教育の中、正直やり尽くした感があるんですよ。 そして、山鹿市は先ほどのご説明の中にもあったように、人材的に恵まれてますし、かなり手を打ってきたと思います。 私自身は正直、不登校という言葉が市民権を得ること自体にものすごく抵抗がある人間なんですよ。 今でもですね。でも状況を考えると、そういういったことばかりは言っていられないので、1番感じたことはですね、不登校の子供の要因分析が、ここに出してあるように、「複雑化している」、「多様化している」、「対応に苦慮する状況になっている」という言葉で何か逃げてはいけないと思うんですよ。 原因は確かに複雑化して、何をどう見ていいのか分からないような時代になっているけれども、それでもなお、要因分析をやらないと手立てを打てないはずなんですよね。 要因分析をどうしたらいいんだろうなと思って、調べたら、去年出ているんですよ。文部科学省の委託で、報告書があります。それを読んでいく中で、やはり現状、不登校状態にある子供たちの要因分析をある程度カテゴリーに分ければ、この子はこういう傾向で、これと、これと、これが当てはまっているとか、学校の中では何となく情報収集はされていると思うけれども、市の子供たちとして見たときに、私達は何かそこに山鹿市独特の傾向がないものかどうかだけをチェックしなきゃならないかなと思ったんですね。 昨年3月に出た報告書は読まれましたか。後で置いていきますね。面白かったです。 一概に分析をしたからといって、そこから見えてきて、手を打てるものがあるのかというときに、学校でできることは先ほど言いましたように、結構限られてきます。 そして、踏み込めない部分もあってですね。 そこをどうするかというときに、やはり行政が力を持たないかなと思うんですよ。対応するためにもですね。報告書の中のまとめのところで少し述べられているんですけど、なぜ、そんなふうな状況になってきたのかという辺りに焦点を絞って、今後分析しなければならないと思います。なぜ、なったのかのところそれぞれの学校現場で見ていくことがとても大事になると思いました。 そして、要因分析とともに、そのプロセスについても光を当てていかなきゃならないかなと思いました。 それから、学校から離れてみて、こういったことができたらいいなというようなことを考えたときに、できたらいいなというのは個人の考えとかなんかじゃなくてですね、不登校になったがために、何が1番その子にとって幸せにならない原因を</p>

	<p>作っているのか、つまりその子にとって不利になるものは何なのかを1番考えられるのは、社会性ではないかなと思うんです。</p> <p>学校というところは教科を学ぶところだけではなく、特にやっぱり人間関係であったり、その中で切磋琢磨することとか、そこから成長していくものとか、ものすごく大きいんですよね。</p> <p>むしろ、そっちの方が学校という組織にはそれが1番大きいと思うんですよ。</p> <p>教科の成績よりも、そちらが重要、同年齢の集団の中で社会性を育む体験、経験そういったものがほとんど無くなった状態になるんです。不登校になってしまえば。</p> <p>だから、そこをどうしてやるかということですよ。</p> <p>我々にできることは教育的に学校を離れてですね、我々ができることを考える必要があるのではないかなと強く思います。</p> <p>そのためには、これから先は私が考えていることなんです、やはり社会教育的なところを頑張ってみる。山鹿市に行けば、選択されるような山鹿市になるためには、山鹿市で暮らせば社会教育分野で救ってもらえるじゃないかというような具体的な施策があればいいなと思います。</p> <p>公民館活動とかやっているんですよね。公民館主事さんたちが一生懸命やってらっしゃるけど、ちょっと子供向けの部分が少ないし、足りていない。</p> <p>以前、日本生活体験学習学会というところに所属していた関係もありまして、体験活動はとても子供を育てるといえるのは実感しているところなんです、公民館あたりで、子供たちの体験活動を率先してやっていくような仕組みが山鹿市でできないかなと思います。</p> <p>前々回の総合教育会議のときに、健幸都市宣言の話のときに、山でアスレチックなんかできないかという話をしました。要はですね、山鹿市は自然環境の素晴らしいところを持っているから、そういうことを活用した自然体験のようなプログラムを作れないものかなと、そういうのができたらいいなということを思います。</p> <p>そんなことを思っているときにですね、実はうちの地域には移住者をかなり来ているんですが、その中の1人が奈良から来た人なんです、奈良の吉野で、自然体験プログラムを子供たちに提供したり、大人にもワークショップさせたりとか、そういうことをやってる人がたまたま来たんですよ。</p> <p>今、仕掛けているところなんですけど、そういう人材が隠れているんです。人材が結構いらっしゃると思うんですよ。</p> <p>そういう人たちを使ってもいいですし、子供たちが学校というハコには足が向かなくても、そうではないところに、実際向いている子供もたくさんいるわけなんです。</p> <p>PRの仕方とうまくかみ合えば、そういったところで多少なりとも救えるのかなと思います。それが学校に結びつくかどうかというのは、急に結びつくことではないですけども、不登校になった子供たちに足りなくなったものをどうするかということ、私達は考えたいなと思っています。</p> <p>以上です。</p>
早田市長	<p>ありがとうございます。</p> <p>今、山鹿市では鹿北小学校、中学校で特認校の指定を受けて、そういった子供た</p>

	<p>ちが通っている一方で、不登校の子供たちも現実にあります。</p> <p>先ほどの説明で、家庭訪問したら、「来なくていい」と言う親もいるということで、片や学校に行かせたい、どうにかして行かせたい親がいる中で、「来なくていい」という意味がちょっと分かりませんが、ほったらかしにしてる家庭もあるということで、非常に複雑でありますけど、今、野中委員がおっしゃったように、学校に行かなくても、社会に出て通用する人間を育てればよいというようなことをですね、適応ですかね、極端に言いますと、日本は義務教育というのがあって、そこで中学校まではしっかりと勉強と集団生活そういったものを見つけていくんですけども、そういう中で、フリースクールとかそういうのがあって、そういう子供たちが本当に社会に出て通用するのか、しないのかですよ。</p> <p>そこが通用するのであれば、もう学校に行かなくても他のことをして、社会で立派に育つ生活できればいいんでしょうけど、それがどうなるのかというのが未知数であります。</p> <p>今の日本では、しっかり中学校までは義務教育として教えたらいいんだろーと思えます。</p>
堀田教育長	<p>鹿北小・中学校は不登校ゼロです。</p> <p>何年も続いているんですよ。</p> <p>なぜ、ゼロなのか。人数が少ないからという簡単な見方もあるかもしれないけど、それだけ手厚く教育をやっているからだと思います。</p> <p>よそがやっていないという訳ではないんですけど、何の違いがあるかということですね、不登校ゼロにすることの意識が大事です。不登校という言葉は、私はあんまり好きじゃないんですけど、レッテルを貼ってしまいます。</p> <p>「学校に来れなくなった子供」というような捉え方をしないとですね、解決していかないんですよ。</p> <p>なぜ、学校に来れなくなったかというのが、分析だろーと思いますけれども、今私達が掴んでいるのは、人間関係で躓きました。勉強が分からなくなりました。担任の先生、学校の先生との折り合いが悪くなりました。</p> <p>そういうのが原因として、今出てくるんですよ。</p> <p>来れなくなったというのは、大なり小なり、私達教育委員会も含めて、学校に責任があるというような捉え方をしないとですね、減らないんです。</p> <p>だから、それを家庭が悪いとか、もちろん家庭の責任もだいぶあるんですよ。</p> <p>だから学校に行かないから、フリースクールに行くという家庭はお金があるところですよ。そういう家庭はあんまりメスを入れなくていいんですけど、フリースクールは、5万も7万も払ってやるんですよ。そういう家庭があんまり心配してないんですよ。そういうのはもう親のエゴと思うんですよ。</p> <p>「来ないでくれ」と親が言うのは、学校に責任があるんだよということを思っているから、「来ないでくれ」と言われるんですよ。</p> <p>そこら辺を私達は分からないと、この不登校対策にはならないんです。今、山鹿市が何をやっているかということと、とにかくコロナ禍の前の取り組みに変えようという意識を、私達も、子供も、保護者も、全てがコロナ禍の前の不登校の取り組みをやろうという意識を変えないといけないと思っています。</p> <p>ですから、校長会でもその話をしました。</p>

	<p>学校で校長先生も授業を見て回られていますけれども、空席があったときに気にならなくなっているんですよ。どうせ今日は来ていないなあって、その意識を変えない限り、職員室の横に黒板があるんですよ。今日の欠席者を書いてあるんですよ。</p> <p>以前は、コロナ禍の前は来てなかったら、すぐ家庭訪問をしようというような意識があったけど、だんだん、だんだん弱まってきました。</p> <p>だから、もう1度私達の責任で、教育委員会の責任で元に戻すというような取り組みを、始めていこうかなと思っています。</p> <p>私は文科省とか、県の指導とかはあてにしていなくていいんですよ。現場は分からないで、勝手なことを言うから、私は全然あてにしません。</p> <p>それはなぜかという、山鹿が初めて、子供たちの不登校を減らすために、朝の朝会を全部やめろというような取り組みを始めたのは、全国で山鹿市が初めてだったんですよね。</p> <p>だからそういう取り組みを、私達は今後も本当にゼロにしようと思うんだったら、やらなければいけないかなと思っています。</p> <p>それからもう1つはですね。朝から担任が迎えに行けと言っても、子供と担任が合わないのがあります。担任が行ったので、余計に悪くなった例もあるんですよ。</p> <p>だから、学校の中で職員は10人も20人もいる訳ですから、子供と相性が良い先生を家庭訪問にやりなさいという取り組みをやってきました。</p> <p>誰が行っても良いというような問題ではありません。信頼関係が関わってきます。</p> <p>そういう取り組みをもう1回戻そうと思います。</p> <p>ただ、気になっているのは、以前は何か事故があったら、やられていたなあと思いましたが、担任が朝から迎えに行くのは、公用車ではないので駄目なんですよ。</p> <p>先生が子供を乗せて、迎えに行くというのは基本的には駄目だけど、そのことは目をつぶっていました。</p> <p>来ていなかったら、迎えにいきなさいというような指導をしていましたので、私は何かあったら責任を取ろうという覚悟はあります。それぐらいのことをやらないと、簡単には無くならないです。</p> <p>だから、今年本当に感謝しているのは、ゆめほたるに公用車を1台配属してもらいました。それで行ってくれと、迎えに行くことで、子供も保護者も意識が変わってきます。</p> <p>毎日必ず先生が来るということで、もう1回徹底するとどうにかなると思います。どうにかなると簡単に言いますが、そういう思いを持っているということです。</p> <p>以上です。</p>
野中委員	<p>ちょっといいですか。</p> <p>誤解がないように言います。私が最初に述べたようにですね、学校に来れないというのは、とんでもないと思っている人間です。</p> <p>だから、行かなくてもいいということを言っている話ではないのは、分かっていたきたいと思います。</p> <p>ただ、現実の状況を見たときに、こういうことが必要なのかなという話をしまし</p>

	<p>た。そもそもはですね、子供は、親が学校に行かないくてもいいよというような親でも、学校に行きたがる学校をつくるべきです。</p> <p>私が非常に大事だなと思うのは、「学校風土の見える化」、学校風土がよく見えている学校の子供は、スクールプライドが醸成されている学校の子供は意外と落ち着いているような気がします。そこに何か希望があるような気がします。</p> <p>私が鹿北中に赴任したときに、引き継いだときは 11 人もいましたけれども、半年ぐらいである程度良くなってきました。</p> <p>最終的に卒業式に來れなかった子供は 1 名でした。大体半年ぐらいで、堀田教育長も菊鹿中で経験していることです。</p> <p>あれだけいたのを、減らしたのは簡単に言えば、学校のカラーかな。前向きなカラー、どれだけそういうもの掲げて学校経営ができているのか、人によってずいぶん変わってくるのではないかなと思います。</p> <p>魅力のある学校をつかって、それを発信していく。</p> <p>そうすることで、親御さんの情報が足りなくなっているんじゃないですかね、学校というものの価値が、本当に昔は学校は行かなければいけないもの、義務教育だから行かなければいけないもの、そこがあまくなってきてしまって、それを放置してきた感があります。学校というところの意味を伝えることに力を入れる必要があるのかなと思いました。</p> <p>それともう 1 点、私も小・中学校の教員でした。小中学校のことばかりなんですよね。</p> <p>だけど、要因は保育園からありますよね。保育園、幼稚園の頃、時々保育園に行っていますが、ちょっと怪しい子供がいっぱいいるんですよね。そのことを私たちが把握しているのか、そして、それを小学校に有効な形でつなげているのかなというのが、入学した時点になって初めてつなぎについては、かなり意識して学校は取り組みます。</p> <p>だから、それ以前の情報交換がなかなかできないので、その辺もちょっと大事になってくるかなと思います。</p>
早田市長	学校現場に 1 番近い立山委員、お願いします。
立山委員	<p>本当に、理由が分からない子が多いですね。</p> <p>うちの近所の子供もですね、家から 50 メートルくらいですけど、不登校気味でお兄ちゃん、お姉ちゃんも不登校ですね。学校も辞めて、高校も辞めたとか聞いています。</p> <p>最近その子が引っ越してきてですね、やっぱり学校になかなか行けなかったんですけど、うちの子供に毎日迎えに行けよと言って、迎えに行ってますね、一緒に登校するようにしたんですね。だいが行くようになってですね、うちにも遊びに来るようになって、「友達できた」とかいろいろ聞くと、今はゲームの世界での友達なんですよね。</p> <p>インターネットでつながったものが友達で、「お前そんなものは、友達じゃ無いよ」と言って、「学校で友達を作らないといけないよ」という話をしてて、最近は、毎日迎えに行って行くようになりました。</p> <p>お父さん、お母さんからうちに来て、お礼やお菓子をもらったりするんですよね。</p>

	<p>人それぞれ不登校の子供は理由があると思うので、先ほど言われたように、膝を交えて、1人、1人話を聞いてしていくしかないかなと思うんですよね。本当にそれだけだろうと思います。</p>
堀田教育長	<p>立山委員が言われたことが、やっぱり原点だなと思いました。毎日迎えに行くようになったら、来るようになったということは、原点なんですよ。</p> <p>先ほど、たまたま野中委員が菊鹿中のときのことを言われました。菊鹿中にいるときにですね、当時の教育長から、不登校が8人いましたので、教育長から1年でゼロにしなさいという命令が出まして、とてもなるかという思いでありました。</p> <p>ただ、しなさいと言われると、僕は市長から1年でゼロにしなさいと言われてたら、どうにかしないとイケません。</p> <p>菊鹿中の時に県の指導カウンセラーが週3回が入ってありました。だけど、私は週3回ではどうにもならないと思っていましたから、当時の教育委員会にこの先生をあと3日間、毎日勤務体制にしてくれということをお願いしました。そして、その先生が毎日来てくれようになりました。</p> <p>校長の私とその先生で毎日家庭訪問をしました。</p> <p>ある家庭に行ったときに、菊鹿は3世帯が多いんですよ。「何しに来たか」と言われて、怒られました。</p> <p>だけど、毎日、毎日行くことで、だんだん、だんだん分かってきて、うちの子供が行けなくなったのは学校の責任ということ強く思っていました。人間関係とかですね。その先生は子供と話してください。僕はおじいちゃん、おばあちゃんとお母さんたちと話すということでした。</p> <p>お母さんが言われたのは、子供が学校に行けなくなったことで「家庭の中が真っ暗になった」と言われるんですよ。</p> <p>自分は嫁いできているので、おじいちゃん、おばあちゃんたちは昔の人だから、「なんでうちの子供は学校に行かないのか」と言って、毎日親が責められているんです。「家庭の中がぐちゃぐちゃになってしまった」と本音で言われました。</p> <p>私はこれだなと、やっぱり謝りましたよ、学校の責任です。申し訳ないと、必ず学校に来れるようにしますということで、おじいちゃん、おばあちゃんにも了解を得ました。その代わりに、家庭の中でしっかり見守ってくださいと、お母さんは本当は抱きしめてやりたいんですよ。子供を怒るばかりではなくて、母親も子供に「何で行かないのね」とあたってしまった。</p> <p>だから、どんどん深みに入っていったんですよ。</p> <p>その子供は3ヶ月後から、来れるようになりました。いろんな実践の中で、どれがいいということは分かりませんが、やっぱり関わることだと思います。</p> <p>とにかく子供との信頼関係、校長会で話したのは、「親と勝負するんじゃないよ、教育は」。</p> <p>私達は教育者だから、子供とだという話を校長会では常にしています。</p> <p>子供との関係さえ作ったらいいんです。子供が帰ってから、親に言っているんですよ。</p> <p>だから、その子供と学校との関係ができてないから、そういう状況になるんです</p>

	<p>よね。</p> <p>だから今は、とにかく子供と勝負しましょうということを声高らかに言っているところです。</p> <p>以上です。</p>
早田市長	<p>はい、ありがとうございました。</p> <p>それぞれ意見も出ましたので、時間も限られていますので、不登校対策事業については以上で終わらせていただきたいと思います。</p> <p>次に、議題2の「幼児期からの英語教育の推進について」説明をお願いします。</p>
西浦学校教育指導室長	<p>「幼児期からの英語教育の推進について」、資料の5ページから説明させていただきます。</p> <p>本市における英語教育の現状についてですが、小学校段階における英語教育の充実について小学校5,6年生から英語、外国語が正式な教科となりました。</p> <p>ただ5年、6年だけではなくて、以前から英語に携わるような取り組みを行っているところです。各小学校に英語専科の職員を配置していただいております。より専門的な授業を行っているというのが現状です。</p> <p>また、ALTにつきましても、10名の外国語指導助手が各学校に携わっています。これも他の市町村から比べると非常に手厚く任用していただいております。</p> <p>また、小学校においては独自のイングリッシュキャンプ、英語を使って、生活したり、コミュニケーションを図ったり、興味関心を高めるための取り組みが行われております。</p> <p>ALTが入ることで、より専門的な指導にもなりますし、子供たちが興味・関心を示すような教材の準備等が充実し、子供たちに英語の力をつける取り組みがなされております。</p> <p>熊本県におきましても英語対策で、英語推進室等を数年前から設置しており、県全体で英語を高めようとしていますが、成果が出ていない状況でございます。</p> <p>本市におきましても、子供たちのアンケート結果を見ますと、英語が好きだ、楽しいという結果が出ていますが、テストになりますと点数が取れずに課題となっています。</p> <p>山鹿市として分析を行いました。小学校では英語の先生方と英語の楽しさ等をしっかり身につけ、話したり、聞いたり、コミュニケーション力の向上が見られます。</p> <p>しかし、中学校に入りますと書くことが入ってきますので、その壁が大きいという現状があります。小学校・中学校、英語専科の先生方も含めて、様々な研究会等を通して、英語指導力向上を図っています。書くことに対して子供たちの苦手意識をどう直していくかということが大きな課題です。</p> <p>今後の方針としまして、4領域（読む、書く、話す、聞く）のバランスの取れた力をつけるために、しっかり小中連携を意識しながら、取り組みの充実を図っていただければと考えております。</p> <p>幼少期からの英語教育について、学習指導要領には小学校3年生から英語という言葉が出てきますが、小学校1,2年生には出てきません。</p> <p>保育園、幼稚園にもございません。山鹿市内の保育園、幼稚園に調査をかけましたが、独自に英語に携わった取り組みをされている保育園、幼稚園もあるようです。</p>

	<p>現在、小学校、中学校に ALT10 名が派遣されております。長期休業日に ALT の先生方を保育園等に派遣をして、一緒に遊ぶ経験をさせながら、小さい段階から英語に携わって、英語を好きになるような取り組みが今後できればと考えているところです。</p> <p>熊本県全体でも、英語は課題だと言われています。</p> <p>本市においても英語の先生方は努力をされており、点数を取るためにはどうすればいいかと日頃から考えておられてます。</p> <p>子供たちに英語を学ばせて力をつけるのは大事ですが、まずは英語を好きになるような授業の展開を指導室の方では指導してまいりました。その結果が小学校において、「特に英語が好きです」という結果が高くなっておりますので、あとはそれに準じて書く力をつけて、山鹿市だけではなくて、世界に飛び出すような子供たちになるように、取り組んでいければと考えているところです。</p> <p>簡単ですが、説明は以上です。</p>
早田市長	<p>ただいま、「幼児からの英語教育の推進」ということで、小学校・中学校の ALT とかその他の取り組みの説明がございましたけれども、幼児期からの英語教育は、冒頭に少し話をしましたけれども、私の 2 期目の公約にも書いていますけれども、とにかくこれからは本当に国際的になってきます。</p> <p>昔の若い頃ですね、日本で外国人と出会うと、異人にあつたみたいで、なんか緊張していましたけれども、これからの子供たちは普通に英語で喋って、ビジネスとか観光とかそういったところに行ったり来たり、多分そうなるような時代がもうすぐそこまで来ているというふうに思います。</p> <p>山鹿の将来のある子供たちにですね、山鹿のために、やっぱり外に出て、故郷山鹿の発展のために活躍できる子供を作り上げたいという思いがあつての幼児期からの英語教育ということでございます。</p> <p>以前、熊本学園大学のカーク・マスデンさんに来ていただいてですね、「読み聞かせの絵本」の取り組みについて、少しお話をいただいたこともございまして、私も話を聞きながら、非常に優しくですね、分かりやすい英語、絵本を使つての英語教育だなと思いました。</p> <p>そういったものが、山鹿市でも取り組めないかという思いで、今日の議題に挙げさせていただきました。</p> <p>皆様からのご意見をお願いいたします。</p>
堀田教育長	<p>市長からの紹介で、熊本学園大学の教授に来てもらった件は、現在どうなっていますか。</p>
西浦学校教育指導室長	<p>大道小学校にお願いしまして、今準備を進めているところです。</p>
堀田教育長	<p>まだ、実践はしていないんですか。</p>
北本首席教育審議員	<p>年度明けてからの調整で動いています。「読み聞かせの絵本」も図書館にもあるということなので、状況を把握しながら、それと ALT を活用しながら次年度進めていこうと思います。</p>
堀田教育長	<p>来年度は、大道小学校が指定になるわけですか。</p>

北本首席教育審議員	大道小学校が指定になります。
堀田教育長	1校だけですか。
北本首席教育審議員	それと、三玉小も検討しています。
堀田教育長	分かりました。
早田市長	私が思っているのは、保育園・幼稚園からですね、高校まで一貫して英語教育ができないかなという部分もあります。小・中学校では、ALTがありますけれども、それから先の高校も、鹿本高校や熊本市内の高校に行っていますけれども、鹿本高校や城北高校でも、この英語教育が引き継がれて、本当に英語が喋れる子供がどんどん、どんどん山鹿の力で、増えていけばいいなという思いもございますので、そういった意味も含めて、何かご意見等ございましたら、よろしく願いいたします。
野中委員	先ほど、おっしゃった「読み聞かせ」の件ですけれども、これって全校でできることではないんですか。指定してどうこうではなくて、むしろ、どこの小学校でも「読み聞かせ」をしていますよね。中学校でしているところもあるんですよ。そこに適切な本を紹介したら、一般の教員でもできるし、保護者でも、英語の教員でもできるわけなので、すぐにでもできる話と思います。
堀田教育長	<p>まずは、やらせようということです。</p> <p>市長からの紹介で、私達も話を聞いたんですよ。見せてもらって、「いいな」、「本当にすごいな」、「これはいいぞ」と思って、そのときに、どこかでしようという話になって、そしたら、いろんな課題も出てきました。本をどうしようか。誰が読み聞かせをするのか。低学年だから、先生には負担はかけられないし、「読み聞かせ」はどこの学校でもしているんですよ。</p> <p>地域の人たちがしていますけれども、その人たちが果たして、「英語の読み聞かせ」をするのか、いろんな課題が出たので、まず1、2校を指定して、どういうやり方がいいかということしてみたいと思います。</p> <p>僕は去年からしているのかなと思ったけど、今年の4月からですね。</p> <p>おっしゃるとおり、やろうと思ったら全部一遍にできます。</p> <p>だけど、指導者の問題とかがあります。</p>
野中委員	難しく考えないで、できる話だと思うんです。
北本首席教育審議員	<p>私も市長と一緒に参加させてもらいましたけど、外国語を話す方が「読み聞かせ」をする提案がそのときにありました。</p> <p>山鹿市にALTがいますので、ALTが行けるタイミングと、「読み聞かせ」のタイミングをうまくマッチングしていくと、スムーズに全ての学校に行けるかなということは、考えていました。</p> <p>野中委員からもありましたけど、できるだけ進めながら、広げていければ、うまくいくかなと思っています。</p>
野中委員	<p>いろんな要素が入ってきますよね。</p> <p>話す、聞くだけでなく、ALTを使えば、ネイティブの人との出会いだけでも考えると、保育園・幼稚園でもできるんですよ。</p>

	<p>できることは、すぐに取りかかる方がいいと思います。</p> <p>とにかく、山鹿の英語力というのは、ちょっと寂しいものがあるので、そこに直結するようなものではないと思うけれども、将来的に続けていくうちに必ず変わっていくと思います。</p>
早田市長	<p>ありがとうございます。</p> <p>他にございませんか。</p>
野口委員	<p>私も英語は苦手意識を持っていますけれども、とにかく小さいうちに、英語嫌いにならない、「英語は楽しいよ」と、いろんな情報が入ってきて、興味が出て、ちょっと調べてみようかと、要は「楽しいよ」というようなことをやっていただきたいなと思うんですよ。</p> <p>ただ、山鹿は、入試英語は苦手みたいなんで、そこは、まだ先生方の力によるところが大きいです。</p> <p>苦手意識がなければ、今うちの息子も苦手なんですけど、ドイツ語だろうが、英語だろうが、海外出張行って、翻訳機を持ってやっていますから、その苦手意識さえなければ、何とか開けるんですよ。</p> <p>コミュニケーション能力があって、苦手意識さえなければできるということもありますので、まずは小さいときから「楽しいよ」ということをに力を入れていただければなと思います。</p> <p>入試英語は、英語の先生に頑張ってもらっていて、本当に先生によって、ゴロツと変わります。</p>
早田市長	<p>私も海外行くと喋れないので、ボディランゲージでしています。喋れたら、多分世界にもっと友達ができたなという思いはあります。もったいないなという気がするんですね。喋れないことが。</p> <p>いろんなJCとかの活動で思いましたね。</p> <p>今、山鹿の子供にはそういう思いをさせたくないなというのがありますんで、ぜひ、来年度の骨格予算なのか、肉づけ予算なのか、ぜひ上げていただいでですね、事業として取り組んでいければと思いますので、教育委員会の方も、それから行政の方もよろしくお願いいたします。</p>
堀田教育長	<p>今の子供たちは、英語アレルギーはいないよね。</p> <p>英語の授業は楽しんでいますよね。</p> <p>入試のテストとは違います。</p>
早田市長	<p>テストでいいので、中学生に豊前街道で外国人に対して英語で旅先案内人を1回してもらいたいんですよ。</p> <p>どれだけの英語力で外国人に説明できるのか。</p> <p>そういう取り組みも、実践をしてもらいたいなと思いますので、まずはテストでもいいので、どれぐらいの英語力かというか、中学生のレベルが分かると思いますので、ぜひ1回やっていただきたいと思います。</p>
立山委員	<p>うちの子は、多分喜んでやると思います。</p>
堀田教育長	<p>3級、2級を持っている子供はできるよね。</p>
立山委員	<p>2級ぐらいでないですかね。</p>

堀田教育長	中学生で2級はあんまりいないんですよ。3級はかなり取っていますよね。
西浦学校教育指導室長	はい。中学生においては、これは私の考えですが、外国の方がおられて、まずそこで勇気を出して、話しかけるとするのが1つ目のカギですね。そこで話しかけると、自分が持っている少ない英語力でも、どうにかして伝えたいと思いますので、すごくいい勉強になるだろうし、ジェスチャーとか、身振り・手振りとか、絵を書いたりして伝えることも、私はいい勉強になると思います。 今市長が言われたような取り組みは、子供たちの中には失敗することもあるかもしれませんが、それがいい方向に行くように学校側はサポートしていきます。
早田市長	台湾から子供たちが来ていたじゃないですか。ああいうときは英語で喋るんですか。
堀田教育長	鹿北では英語で話していました。
西浦学校教育指導室長	笑顔だけは忘れずに。何を言われているか、分からないけど笑顔をしっかり作ってと言いました。
早田市長	向こうの子供は英語ですか。
西浦学校教育指導室長	英語でした。
早田市長	中国語と英語ですか。
立山委員	英語です。
早田市長	日本人はどっちかという日本語ですね。
立山委員	日本人だけですもんね。英語を喋れないのは。うちの実習生も英語なんです。英語の教育を受けてないですけど、英語を喋るんです。
早田市長	やっぱり、生きるためですか。
立山委員	そうです。ベトナムの人でも英語です。
早田市長	時間も1時間を少し過ぎましたけれども、2つの議題について、意見交換をすることができました。 それでは、これを持ちまして議題についての意見交換を終わらせていただきたいと思います。 次に、その他へ移ります。 事務局から何かございませんか。
小林教育総務課長補佐	特に予定はありません。
早田市長	それでは、本日は大変貴重なご意見をいただき、誠にありがとうございました。以上で議事を終わります。 ありがとうございました。
小林教育総務課長補佐	本日の会議の全日程は終了いたしました。 早田市長、教育委員の皆様、誠にありがとうございました。 それでは、これを持ちまして、令和6年度第2回山鹿市総合教育会議を終了しま

	<p>す。 皆様ご起立ください。礼。 お疲れ様でした。</p>
--	---